

<一冊の本シリーズ 2>

思い出の本

京都大学図書館機構 副機構長, 経済学研究科 教授 **森 棟 公 夫**

「一冊の本」シリーズですが、私にはこの一冊という本がありません。また、大学院に入った後、特に留学後は研究上の本は緻密に読んでいますが、一般的な本は目を通す以上のことはしていません。本来は本好きで、今でも小説などの文章をじっと味わったりしていますが。

本好きなのは子供の頃からで、小学生の頃は図書室の本を手当たり次第に読んでいました。親に買ってもらった本は、話の内容を細かく憶えるまで何度も繰り返して読みました。テレビ時代が始まる前で、ラジオも夜は浪曲が鳴っていたくらいでしたから、本を読む以外にはすることもなかったのでしょう。当時読んだ本についての記憶は不正確で、買ってもらった本も度重なる引っ越しで何も残っておらず、詳細は少しも分かりません。子供用の文庫などに含まれているものも多いのですが、「揚子江の少年」という本、その後見かけません。中国の子供のかつたるい毎日の話でしたが、当時では未知の外国の話でもあり、興味を引かれて読み返しました。小学生以前に戻りますが、今の親たちが子供にする「読み聞かせ」でもありませんが、母が読んでくれた絵本を思い出します。母が子供の時の古い絵本で、傷んでいましたが立派なもので、美しい武者絵が描いてありました。牧場で楽しく暮らしている馬の親子がいましたが、母馬は戦争に出ていき、そのまま帰ってこないという話でした。牧場の背景にある岡の稜線を、騎馬の一群が駆けていく絵が私の記憶に残っています。この話は、最近も見かける「お馬の親子」で、

私にとって一番古い本です。

テレビが広まりかけたのが、1959年の皇太子と美智子さんのご成婚の頃で、私が中学生になったこともあります。海外のニュースも多く入ってくるようになったように思えます。家に、「ロンドン・東京5万キロ」といった題名の本がありました。豊田自動車のクラウンで、ロンドンから東京への転勤、引っ越しをするというドキュメントでしたが、私には知らない国を国産の自動車で走り回ることが誠に夢のように思えたものです。ヨーロッパの人たちが、見慣れない車を見て集まってくるといったくだりもあったような気がします。まさか、日本が自動車大国になるなどとは想像できない頃でした。「コンチキ号漂流記」はチリからポリネシアへ筏で流れていくという学術的な冒険のドキュメントだったと思いますが、想像の範囲を超えた冒険だったため、心に残っています。高校の頃は、学校で薦められたジードとかドストエフスキーなどの他に、当時話題になった本だったのでしょうか、「チボー家の人々」を繰り返して読みました。小説としておもしろかっただけでなく、フランスの資産階級の生活とか、第一次世界大戦の時代の描写などにおおいに心を引かれました。

高校時代に読んだ小説以外の本のなかで、「モゴール族探検記」には強い印象を持ちました。この本も今は手元にないため詳細は分かりませんが、梅棹先生のグループが行った今で言うフィールド調査の記録だったのでしょうか。（ネットで調べたところ、岩波新書で再版されている。）本を買ってきた父は、税金を使って

役に立たないことをしてという風な文句を言っていました。私には大学の先生はこんなおもしろいことをして暮らしているのかと思いました。大学の先生は、仕事の中で冒険をしているといった認識です。これは大きくて、両親に僕は将来大学の先生になって、こんな冒険をするんだ、と言いました。父が医者だったもので、医学部以外に進学する場合には理由が必要でしたから。父は、そうかと言っただけでした。後で聞いてみると、医者にならされて、一生文句を言っている医者の子を数多く知っていたから黙っていたそうです。しかし、私たちの時代では、どの学部に行けば、勉強の中で冒険ができるのかなどといった情報はよく分かりませんでした。

私はその後、「ケインズ」（伊東光晴、岩波新書）でケインズという経済学者の活躍や、今でいうマクロ理論の断片を知り、経済学が理論的な分析を知りました。著者の伊東先生と後年親しくなるなどとは思っていませんでしたが。さらに、高校三年の夏に「経済学 50 年」（大内兵衛）を読んで、先生達の生活や、研究上のやりとりなどにあこがれを抱くようになりました。やはり大学の先生はおもしろい生活をしているという認識が高まり、専門は何でも良かったのですが、よくも分からずに経済学部を受験しました。経済学部に入って以来、研究分野は当初の予定とは大きくずれましたが、現在に至っています。

（もりむね きみお）

地球にやさしい戦車

京都大学人文科学研究所 助手 藤原 辰史

京都大学附属図書館の地下書庫に『戦車』という本が所蔵されている。古本市場では、3万円をくだらない貴重本だ。全 602 ページ＋付録 57 ページ、高さは 27cm、横幅は 19cm となかなか重厚な風貌である。奥付をみると、1942 年 6 月 21 日、初版 1000 部発行、発行所は東京神田神保町の山海堂出版部とある。著者は猪間駿三^{いの ましゅんぞう}という 1902 年生まれの陸軍少佐だ。

この本と出会ったのは、5 年前、修士論文でナチスのポーランド侵攻について調べるために書庫に入ったときである。偶然見つけたこの本をパラパラめくると、第一次世界大戦から第二次世界大戦初期に至る世界各国の戦車の重量、最速スピード、定員、発動機、武装、搭載可能弾数などが詳細に記されていた（ただし防諜のため日本の戦車についてはほとん

ど触れられていない）。ロールス・ロイス、ルノー、プジョー、フィアット、フォード、ダイムラー、クルップ等どこかで聞いたような会社が戦車メーカーとして名を連ねる。しかし、こうしたデータは、いまでは軍事マニア向けの本やインターネットに書かれてあるから、それほど真新しいものでもない。ましてや、最先端の戦車を開発する企業の研究者にとっては無用の長物でしかないだろう。

正直に告白すれば、当時のわたしにとっても『戦車』は役に立たなかった。ナチスに関して貴重な情報を提供してくれるわけでもない。論文として役立つ箇所はほとんどなく、次の日には附属図書館のカウンターに返却した、と記憶している。

ところが、昨年末、バックナンバーセンターの桂キャンパス移転について調べようと思